「自然災害伝承碑」の代表事例

国土地理院

資料３

洪水
（高知県高知市）

平成10年(1998)9月23～25日、前線による記録的な豪雨により9名の死者と約2万棟の浸水被害があり、特に大津地区は未曽有の被害を被った。再び災害がないことを願って、この集中豪雨最高水位と1972年9月15日の国分川決壊最高水位を刻んだ碑が建立された。

土砂災害
（岐阜県白川町）

昭和43年（1968）8月17日夜半から18日未明に襲った集中豪雨で土石流が発生し、観光バス2台が巻き込まれ飛騨川へ転落、乗客乗員104名が犠牲となった。他にも中濃地方で14名の犠牲者を出した。

地震
（東京都千代田区）

大正12年(1923)9月１日の関東大震災は死者10万人、全壊・全焼30万棟を超える日本史上最大の自然災害であった。この地にあった過去に工部大学校として使われた建物も倒壊し、復興事業で文部省や会計検査院などが建てられた。碑は倒壊した建物のレンガなどで作られている。

地震
（福井県福井市）

昭和23年(1948)6月28日、福井県嶺北北部を震源とする福井地震が発生し、計3,769人、福井市だけでも930人が亡くなった。福井市の全壊率は79%に達し、壊滅的な未曾有の大災害となった。

火山災害
（鹿児島県鹿児島市）

大正3年(1914)、天地を砕く大鳴動とともに桜島は凄惨な大爆発を始め、島民はあわてて自分の船や救援船で対岸に避難した。豊饒な土地は累々たる溶岩と化し、有村村民の多くは移住したが、帰ってきて開拓に従事するものもあった。噴火のてん末を記録し、後世に伝えたい。

津波
（北海道奥尻町）

1993年7月12日午後10時17分、突然奥尻島を襲った北海道南西沖地震により死者・行方不明者を合わせて198名もの人命を奪った大惨事を後世に伝え遺すため建立した。この慰霊碑がある稲穂地区では18名の尊い命が犠牲となった。

津波
（宮城県石巻市）

昭和8年(1933) 3月3日に発生した昭和三陸地震による大津波の教訓
「地震があったら津波の用心」
　石碑の隣に、東日本大震災についての石碑（津波の教え石プロジェクト）も設置されている。

津波
（和歌山県田辺市）

1707年10月28日に発生した宝永地震により多くの家屋が倒壊した。その後の津波により江川浦ではほとんどの家屋が流出し、本町、紺屋町、片町でも過半数が流出した。東光寺前の坂では、文里湾の波と跡之浦の波が打ち合ったと言われている。

津波
（沖縄県名護市）

昭和35年(1960)5月23日南米チリ近海でM8.5の地震が起き大津波が発生。津波は太平洋を横断。当地には、真喜屋小学校があったが津波によって全校舎が破壊された。地域での死者は3人。